

外国語教育とインターネット

尾関 修治

はじめに

本稿では世界的なコミュニケーションの環境としてのインターネットがどう外国語教育、特に日本の英語教育に使われてきたのか、筆者の経験を中心に振り返り、インターネットを英語教育に利用する理由と意義について考えたい。

インターネットが一般に利用されるようになったきっかけは WWW (World Wide Web ; 以下 web) の普及によるところが大きい。インターネットとそこで利用される様々なコミュニケーションのためのアプリケーションはそれまでも色々あったが、Web が革新的だったのは、HTTP (Hyper-Text Transfer Protocol)、つまりリンクにより相互に参照することができるテキストの規格とその転送方法と、ブラウザつまり転送されてきたテキストを手元のパソコン画面に表示し利用者がリンクをクリックしたのを受け付けて転送要求を送信するソフトウェアの両方がそろっていたことだった。前者は 1990 年に CERN (欧州原子核機構) のティム・バーナーズ＝リーが考案し、後者については 1992 年に NCSA (米国立スーパーコンピュータ応用研究所) のアルバイト学生であったマーク・アンドリーセンらが開発した Mosaic が最初に普及したブラウザである。その後 IT 産業の拡大、国策としての高速通信回線の整備などが相互に補強しあって世界的にインターネットの利用が進んできたのは周知の事実である。教育での利用はその拡大の中で必然的に求められたものともいえるが、日本の英語教育には独自にインターネット利用を進める動機があったと考える。

インターネットと web がもたらしたものは、個人による世界規模の「出版」(= 記録に残り不特定多数に繰り返し使用される形態での情報発信) が可能になったこと、多様な情報が蓄積され検索により再利用が可能になったこと、地理的・社会的距離を超えた知的交流が可能になったことなどである。一方で、

使用される言語の偏り、特に英語への偏重や情報のフラット化つまり人類の知的遺産と呼べるものからサブカルチャーに至るまですべてが没価値化するなどの批判もある。

英語教育ではインターネットが普及するごく初期から様々な利用がなされてきた。利用するアプリケーションも、web はもちろん、電子メール、掲示板、ブログ、Skype など、そのときどきの新しいアプリケーションを次々の取り入れられている。なぜ外国語としての英語教育でこのような利用が活発だったのだろうか。

そこには外国語教育の特殊性がある。他の教科、例えば数学などと異なり、教室にとどまっているのでは学習が未完成で、実際の言語使用の場に行かなければ無意味だという要求が強い。それに対してインターネット上には世界中の学習者どうしのネットワークがある。インターネットは学習環境であり同時に実際に英語を使用する目的ともなるのだ。また英語で書かれたニュースなどの豊富な言語資料がある。これを授業に取り入れていこうと試みるのは当然のことである。

どのように利用してきたか

日本の英語教育でのインターネット利用の導入の一例として、筆者自身の経験を中心に歴史を振り返りたい。

筆者は1993年後半に「ハイパーメディア研究会」と称するメーリングリストを立ち上げ、英語教師どうしでメールによる情報共有を始めていた。そのメーリングリストで1993年12月にMosaicが話題となった。筆者がインターネットにアクセスできる環境を手に入れてMosaicを実際に利用できたのは1994年4月だった。

それ以前にもGopherなどのインターネットサービスでアメリカのUCLAの各図書館で図書検索をしたりヨーロッパの学食のその日のメニューを見たりしながら、これが臨場感のある英語教材として活用できないかと議論していた。WebとMosaicの組み合わせはそのような可能性を飛躍的に広げた。それまで専用の通信ソフトで1行ずつ転送され表示されるテキストを目で追っていたのが、Mosaicではグラフィックスやテキストがページにレイアウトされて二次元的に表示されていた。「通信」から「出版物」に進化したのである。

1994年夏前には筆者の当時所属した中部大学語学センターのコンピュータ

システムをインターネットに接続した。当時の名古屋を中心とする地域では、南山大学が中心となり各大学間で草の根的に相互のインターネット接続を始めているという状況だった。その夏にインターネットメールとネットニュースの利用を開始した。ネットニュースとは広義の BBS (電子掲示板) の一種だが、メールとよく似た方式である NNTP (Network News Protocol) によりサーバー間でバケツリレー式に投稿スレッドの転送を繰り返していく。グローバルに転送されていくニュースの他、サイト内部でのニューススレッドを設定することもできる。さっそく学内 LAN 限定の英作文用ネットニュースを立ち上げ、学生と教師が英語で議論する課外活動を開始した。

典型的な利用方法は、教師が課題を投稿し、それに対して学生たちがコメントを投稿し、さらにそれを読んでコメントしていくという文字による議論である。これを英語で行なった。学生の英文中の誤りなどについては明示的に添削せず、教師が言い換えをして投稿し直すなど、あくまで内容に関するコメントの中でよりよい表現を示唆するという形で指導した。

当時の中部大学語学センターはインターネットが利用できる PC (Macintosh SE) 7 台を語学自習室に設置し、授業外での交流活動を希望する学生 35 人がこれを交代で使用するという限られた利用だったが、様々なテーマで活発に英語での議論を楽しんだ。学生たちはそれまでに授業での英作文の課題の経験はあったが、自分が書いた英語が教師以外の大勢に読まれ、それに返事が書かれるということ自体をほとんど経験していなかった。現在のように日本語での電子掲示板の経験もない時代であるから、このようなシステムに戸惑いも見られたが、ほとんどはこの新しい体験を好意的に受け入れていた。率直にいうと教師自身がこのような英語による多人数の即時応答の経験をほとんどしていなかった。学生にとっても教師にとっても、英文はそれまで学習の一環として孤独に書き、教師がそれを一人で読むというものだったのが、突然、書いたものが即時に回覧され読まれ、議論の対象となり、返答されるものになったわけである。

この活動はメールによる相互コメント、つまりメーリングリストも併用しつつ、web によるコミュニケーションが中心となる 1997 年頃まで活発に続けた。とりわけ、1994 年度に行なった、提携校であるオハイオ大学に留学中の学生たちと中部大学の在学生との共同のプロジェクトはインターネットの利便性を活用した印象深い活動となった。(MacDonald et al. 1995) 図 1 に最近の web でのライティング指導用フォーラムの例を示す。

Ozeki's class
尾関の授業サイト

メインメニュー

- ホーム
- お知らせ
- クイズ(火1)09枚
- クイズ(水2)09枚
- クイズ(木3)09枚
- クイズ(金4)09枚
- クイズ(土5)
- クイズ(日6)
- TOEFL ITP対策
- 解題用紙
- Poll
- フォーラム
- xpWiki
- SNS
- マイページ
- チャット
- Blog
- 動画
- WL Intro Audio
- WL2 Video
- ブックマーク
- 単語集
- 配布物や資料・テスト問題
- カレンダー
- サイトマップ
- ALTSYS
- d3dipes
- テーマ編集

ユーザーメニュー

- アカウント情報
- アカウント編集
- イベント通知機能
- ログアウト
- 登録済
- 管理者メニュー

オンライン状況

3人のユーザーが現在オンラインです。
(1人のユーザーが SNS を参照しています。)

登録ユーザー: 1
ゲスト: 2

ozeki さんよ

テーマ選択

最新トピック

- 07月31日 - WL3 U4: Why you shouldn't get a tattoo (79) (World Link 3 HSE)
- 07月29日 - WL3 U5: Culture Capsule (74) (World Link 3 HSE)
- 07月29日 - WL3 U3: An unusual news story (72) (World Link 3 HSE)
- 07月29日 - WL3 U1: Home improvement (81) (World Link 3 HSE)
- 07月28日 - Chapter 6: Higs and Lows in Self-Esteem (p.104) (18) (Prereading)
- 07月27日 - World Link 3 HSE Unit 1 3-B (p.2) (2) (この用語おかしんじゃね?)
- 07月27日 - CFT Unit 2 Ch. 5: Traditional Medicine (13) (Discussion and Writing)
- 07月27日 - Chapter 4: Why So Many More Americans Die in Fires (p.72) (19) (Critical Thinking)
- 07月27日 - Chapter 3: The Birth-Order Myth (p.52) (16) (Critical Thinking)
- 07月27日 - Chapter 2: Close to Home (p.35) (16) (Critical Thinking)

トップページ > Critical Thinking > Chapter 3: The Birth-Order Myth (p.52)

[Critical Thinking] トピック

Chapter 3: The Birth-Order Myth (p.52)

ozeki

2009-05-25 09:44:39

3. One study found that a firstborn was more likely to have high self-esteem if his or her sibling was less than two years younger. Another indicated that spacing had no impact on social competence, and others note positive effects for boys but not for girls. What conclusion can you make about these different studies?

編集

コメント

[5]

16件中 1-16件を表示

1: 010800506

2009-06-01 14:27:44

One study found that a firstborn was more likely to have high self esteem if siblings was less than two years younger. I think this is because he fears if his brother would steal their mother. In the past, he was given all love and attention parents showed, but after the brother was born, the situation differs. Moreover, parents often compared with each other because of proximately of ages. So he tried to stand advantage over his brothers. Another indicated that spacing had no impact on social competence, and others note that positive effects for boys but not for girls. I think this is because the latter way of experiment is different from the former. Also, the reason for the positive effects for boys but not for girls is that generally speaking, girls tend to show little competitive mind.

レスを書く、 編集、 削除

2: 010800689

2009-06-07 19:33:49

A firstborn will consider his/her younger sibling as a competitor and often compete. A firstborn want to show their parents that he/she is superior to his/her younger sibling because their parents treated them as a single unit and they give their same love to their children. Then, a first born may try to get more love by his/her parents and to defeat his/her younger sibling. So I think that a first born is more likely to have high self-esteem if his or her sibling was less than two years younger. The other hand, I don't think spacing had no impact on social competence. Because, if spacing is close, siblings may have many experiences of competence. This experiences will affect social competence whether they are boys or not.

レスを書く、 編集、 削除

3: 010801251

In general the firstborns want to be paid attention to themselves more than their younger

投稿のしかた (書きかけ)

書き込みをするには次のステップが必要じゃ (なんだこのキヤラは) :

- 書き込みたいカテゴリを選択。授業のテキストの名称とか、「雑談」とかのことじゃ。
- そのカテゴリ内のコミュニティー覧が表示されるので、書き込みたいスレのあるコミュニティー右下の「詳細を見る」をクリックじゃ。
- コミュニティー内に書き込みするには、そのコミュニティーに参加することが必要じゃ。もしまだ参加してなければ、コミュニティー画面の一番上「参加する」ボタンがあるので、クリックするんじや。
- コミュニティー内に既に「トピック」(=スレ)があればそれを表示させてコメント投稿じゃ。授業の課題の場合はこのパターンじゃ。
- 雑談板とかなら自由にスレ立てオッケーじゃ。「トピックを作成」をクリックして、スレッドの先頭となる書き込みをするわけじゃ。(この口頭渡れる。)
- その他に、右カラムの「最新トピック」をクリックするとか、ユーザーメニューの「アカウント情報」で自分の参加しているコミュニティーを見るという方法もあるよ。

投稿数ランキング

順位	ユーザー名	投稿数
1	tetsuokato	37
2	330902016	25
3	330902350	23
4	010800484	20
5	330902245	20
6	010800506	19
7	010800441	19
8	010800808	18
9	010801251	17
10	010800689	17

図 1: 最近の授業用 web サイトでのライティングフォーラム

ここまではメールや LAN 内の ネットニュース、つまり読む対象を限定した発信だった。1995 年夏に筆者が web サーバー機を導入し、自前の web サイトを開設し、広く世界への情報発信が可能となった。(http://langue.hyper.chubu.ac.jp/ ; 現在は閉鎖。) ほぼ同時に、web での情報発信を英語授業で開始し、現在に至っている。以下で英語教育と国際交流教育の分野でのインターネット利用とは実際にはどのようなものでどのような効果があるか議論したい。

「相手がいる」コミュニケーション

杉本・朝尾 (2002) に興味深い実験が紹介されている。文法や語彙の誤りを含んだ英語で書かれた自己紹介文を、日本人英語教師に「日本人学生が書いたもの」として「返事を書く」ように指示する。すると教師たちはその英文の添削つまり文法や語彙の誤りを指摘しアドバイスする返事を書く。一方で同じも

のを「外国人学生から送られてきたもの」として提示すると、誤りの指摘ではなく内容に対する返事を書くという結果が得られたというのである。(杉本・朝尾 2002:56)

この場合、自己紹介の文に対する本来望まれる「返事」は後者、つまり内容に対する返事ではないだろうか。自分自身誤りばかりが目にとまる教師としての性癖を反省するとともに、これまで「日本人が日本人に対して書く」英語は英作文の練習としてしかとらえられず、中身のあるコミュニケーションを目的としているとはとらえられていないという事実も伺われる。同じことは日本人が日本人に対して英語で話しかける、日本の一般的な英語の授業でもあるのではないだろうか。つまり相手の英語の正確さに注目し自分の誤りを気にかけるあまり、コミュニケーションの中身が失われることが多いのではないだろうか。

この例に端的に見られる英語教育の反省点として、ひとつには、英語の授業は本当に英語によるコミュニケーションの機会を提供してきたかということがある。コミュニケーションを成り立たせる要因の一つには情報のギャップとそれを埋めたいという欲求がある。名前も出身地も好みの芸能人のタイプも知り尽くしている隣の席の学習者と改めて自己紹介をしてもそこに意味を見いだすのは難しい。しかし教室外の不特定多数に向かって自己紹介をするのであれば、自分の何を語ればいいのか真剣に考え表現を選ぶ動機も生まれてくる。

もうひとつの反省として、教室での英語使用はあくまで「練習」であって、その練習を終えて「正しい」英語が使えるようになるまでは教室外で英語を使えないという姿勢ができてしまっている。これは英語を話すことだけでなく、吹き替えで映画を見てしまう、好きな小説を原文で読んでみようとしないう、聞くことや読むこと、書くことにも影響を与えている。一般に日本では英語の授業以外の生活の場で英語を使用する機会が少ないのが英語運用能力が発達しない理由のひとつといわれている。しかし、準備ができなければ使えないという「正しさ」の要求が、学習者にも教師にも高すぎるのではないか。

この2つの課題を乗り越えて日本の英語の授業で英語による真のコミュニケーション、つまり添削でなく返事をするを成り立たせるために、英語教育に携わる者はこれまで様々な工夫をしてきた。外国人講師(必ずしも英語を母国語としない)を授業に参加させるのもその一つであるし、英語音声の映画を鑑賞したり、LL 装置を使って顔が見えない状態で学習者相互に会話をさせるといった取り組みもそのような手法である。エアメールによる文通(ペンパル

活動)やファックスによる海外の学校との交流も行なわれてきた。

IT革命、とりわけインターネットの普及によって、設備さえあれば安価に即時性が高く距離や時間に制約されないコミュニケーション方法が英語授業でも利用できるようになった。しかし、コミュニケーションの相手を探し、何について語るのか、どのような背景をもって語るのかといった伝達方法以外の部分は旧来のままで、授業にあっては教師による準備や指導が必要なのは変わらない。

国際コミュニケーションの相手探しとテーマ設定において、初期の試みとして活発であったのが IECC (Intercultural E-Mail Classroom Connection) だった。これは教師同士が自分のクラスの生徒・学生との eメールによる交流相手を探すためのプロジェクトで、最盛期には筆者のところにも毎朝交流クラス募集の eメールが何通も送られてきた。年齢層も幼稚園から大学までと幅広く、例えば小学1年生が世界の同世代のクラスで乳歯が抜けている生徒が何人いるか情報交換するなど、ユニークな発想に驚かされ、担当する教師の指導力に感心した。コミュニケーションの方法が普及したとして、やはり普遍性と必然性のあるテーマ設定とその基盤となる指導が必要なのである。

そのような基盤の必要性を理解した上で、共通言語としての英語を受け入れ、教師が補い導くことで直に世界の人々と交流ができる、境界のないフラットな関係を結ぶことができるというのが、インターネットを利用した交流を英語教育に取り入れる大きな意義である。

ITを活用した教育手法がもてはやされる一方で、ネットでのコミュニケーションは顔の見えない言葉だけのやり取りであって真のコミュニケーションではないという批判も筆者自身多く受けてきた。「顔が見える」とはおそらく互いの属性(性別や年齢、社会的地位、人種やファッションなど)を確認した上で、その属性に伴う一般的知識を想起することができるという意味であり、その上で言葉を交わすのでなければ安心して話題を形成し情報を共有できないということであろう。しかしそれは誤解や偏見の源ともなってきたのではないだろうか。「顔が見えない」ネットでのコミュニケーションは言語に大きく寄りかかったコミュニケーションである。「顔が見えない」からこそ、理を重んじ言葉を駆使しなければならない。

授業で学生が海外のペンパルとメール交換をしていると、対応に困って教師に相談してくることがある。例えば相手が自分の顔の画像を添付してきて「あ

あなたの写真を見せてくれ」と言ってくる場合などだ。こんな場合はパソコンの画面の前で困った顔をしていても通じない、こういう理由で嫌だ、そうではなくてこういうコミュニケーションをしたい、と英語で書いて送らなければ通じないよと（時には文例を示して）アドバイスすると、学生は納得して英文メールを書き始める。

社会制度の違いに気づかされることもある。ある男子学生が台湾の学生に送ろうとしている英文メールを見て驚いた。“Do you like a war!?” 「あなたは戦争が好きなのか」と尋ねている。事情を聞くと、その前に相手を送ってきたメールに、日本に留学したいがその前にまず兵隊になるという趣旨のことが書いてあった。台湾では兵役がある。それをすませなければ海外留学に出られないのだ。日本人学生にはそのような知識がなく、また兵役が当然であるという感覚もなかった。自ら好んで軍隊に入隊するものと誤解したのだ。

あるいはアメリカ人女性とメール交換をしていたある女子学生が半泣きで相談してきたことがある。彼女は当時の日本の美白ブームを紹介し、肌の色が白いっていいねと書き送ったが、相手からは自分は黒人だと返事がきて、うろたえているのだ。「顔が見えない」からアメリカ人＝白人と思い込み、人種的多様性への無関心さが露呈してしまったのである。どうしたいのかと聞けば謝りたいという。では、なぜそのようなことになったか言葉で説明し言葉で謝らなければならない。英語教師にできることは英語表現をアドバイスすることだが、学生は英語を書く経験から多くを学んでいく。


感動だけではなく、冷静に論理的に言語が使用できなくては他者とのコミュニケーションはできないということを学ぶ、それもまた、言語教育の一分野である英語教育でインターネットを利用したコミュニケーションを取り入れることの意義なのである。

ブログライティングの意義

1997年頃には、メールを中心としたコミュニケーションから web ページでの発信が中心となってきた。基本的には自己紹介などを英語で書いた「作品」を展示公開する活動である。しかしこれだけでは双方向のコミュニケーションの実感が得られない。自己紹介とはしばしば自己の所属（大学名、サークルなど）や属性（性別、外見など）の紹介に過ぎず、その web ページを読む側にとってはとりあえず受け入れるのみでコメントすべき内容がない。

I'm just a beginner. Quote

2001/7/10 (Tue) 13:37:56 - isc.chubu.ac.jp - 255.255.255.255 [255.255.255.255] - Mozilla/4.7 [ja] (Macintosh; i; PPC) - No.994738744 - Accept Reply



My dream came true. I like motorcycles since I was a child. I got a motorcycle's license at the driving school a month ago. Usually, people get it in 17 hours but I had to spend 10 hours more. I am a wonderful rider. I would like to talk about motorcycles from a beginner's point of view. At first site, I fell in love with motorcycles because they look so cool. I thought it would be great if I could drive it. I think any rider would think so, too. For riders, touring is the most fun and exciting thing to do. I like to be able to feel the wind when I drive the motorcycle. The breeze feels great. There are some bad points about motorcycles, too. For example, motorcyclists can be caught in traffic accidents. They are likely to cause motorcyclists solo accidents. Traffic accidents would lead to serious injury. It is dangerous when motorcyclists get in to the blindspot for car drivers. To attract driver's attention, motorcyclists turn the light even during the day. Motorcyclists should always pay good attention to cars. Have you ever seen women who wear skirts on motorcycle? Most answers would be "No". If I wore fluttering skirts on bike, it would be too exiting. So, when I'm on motorcycle, I cannot wear feminine clothes. This is common among female motorcyclists. Whenever I'm on bike I need to wear a crash helmet, gloves, boots, pants and sunglasses. Appropriate clothes make motorcyclist safe. We have only a few good weather. It is hot during the summer and I'm sweating all over. We need to protect ourselves from the ultraviolet rays because it is not good for the skin. I don't like to get sunburned, either. In winter, we must wear a lot of clothes to keep warm but it becomes harder to move. We can't fight against the weather. No matter how many risks there are, I am attracted to driving a motorcycle. Risk and fun always come together. I think any motorcyclists would agree with me. I will just try to enjoy riding my motorcycle, but very carefully.

図 2 : Show and Tell の web ページの例

そこで画像とメッセージを投稿できる掲示板形式の仕組みを導入し、学生に Show and Tell (ものや写真を見せながら英語で説明する活動) を web で行なわせる試みを始めた。(図 2) これには 2 つのメリットがあった: 1) 提示する画像を決めることで作文のテーマが明確になり、伝えたいことを直裁に書き始めることができる。2) 読む側が書かれた文の巧拙でなくテーマに対するコメントを書きやすい。例えばペットの犬の写真を掲載し、“He’s cute, isn’t he?” と問いかけてから犬にまつわるエピソードを書けば、犬の外観などの書きにくく伝わりにくい描写を省略して本題にすぐ入れるし、読む側も自分の視点でコメントを書きやすくなる。旅行の写真や街で見かけた風景、趣味で収集しているものの写真など、幅広いテーマで英語を書き、それをお互いにあるいは外部の人々に読んでもらいコメントしてもらう活動を通して、読者の視点に立って読まれる文を書くことを学習させた。

後にブログが一般化し、言語教育の分野でもブログを利用したライティングが行われるようになってきた。ブログライティングでは、e メール交流などで

中心となる自己紹介や文化紹介を超えてより日常的な事物について具体的に語られることで、むしろ国籍や文化などの境界を飛び越えた普遍性のある議論、コミュニケーションにつながっている。そのような意味で e メールによる交流で見られた問題点を克服しているのかもしれない。

英語教育におけるブログライティングのもう一つの意義は、「持続性」である。e メール交流が常に特定の相手の存在を必要とするのに対し、ブログは不特定の対象に発信することが可能である。また、投稿したものは蓄積されコメントを受け続けることができる。実際の授業の現場では難しいのだが、授業後も継続的にコミュニケーションの場となり続けることも期待できる。そのような意味で、持続性を伴う学習に発展する可能性がある。

何を目指すか

インターネットを利用した英語教育を 15 年間実践してきた実感していることは、「中心と境界の消失」だ。教室でネットにアクセスするとき、教師と学生でアクセス速度に差はない。メーリングリストや掲示板に投稿するとき教師の発言だけ大きく表示されるわけでもない。全く対等に同じ時間軸と平面上で活動していると感じさせられる。ここまで紹介した実践例で学生たちが求められたのと同様、言語で自己を表現することが教師にも求められる。その表現の内容の質によってのみ評価されるという意味で教師と学生が対等の場で教え学び合うわけである。

一方で学生同士が教え合い学び合うことも、ネット上では容易になる。時間的空間的な制約がない (= 地球の裏側の学生と同じテーマについて英作文を書き合うことができる) というだけでなく、文化や心の境界を越えた個人同士としてコミュニケーションすることしかできなくなるからだ。もちろん「世界がフラットになる」のは英語教育の分野だけでなくインターネットがあらゆる分野にもたらしつつある現象である。しかし、とりわけ英語教育にあっては、その目的が、フラットな関係の個人と個人がコミュニケーションするというものに純化されていくことが期待されてならない。

参考文献

MacDonald, Mary, Tadashi Shiozawa, and Shuji Ozeki. 1995. A Virtual Motivating Experience: An E-mail Exchange Between Students Across the Pacific. In *Virtual Connections*, ed. by Mark Warschauer. University of Hawaii at Manoa. pp.139-141.

杉本卓・朝尾幸次郎．2002．「インターネットを活かした英語教育」．大修館書店．